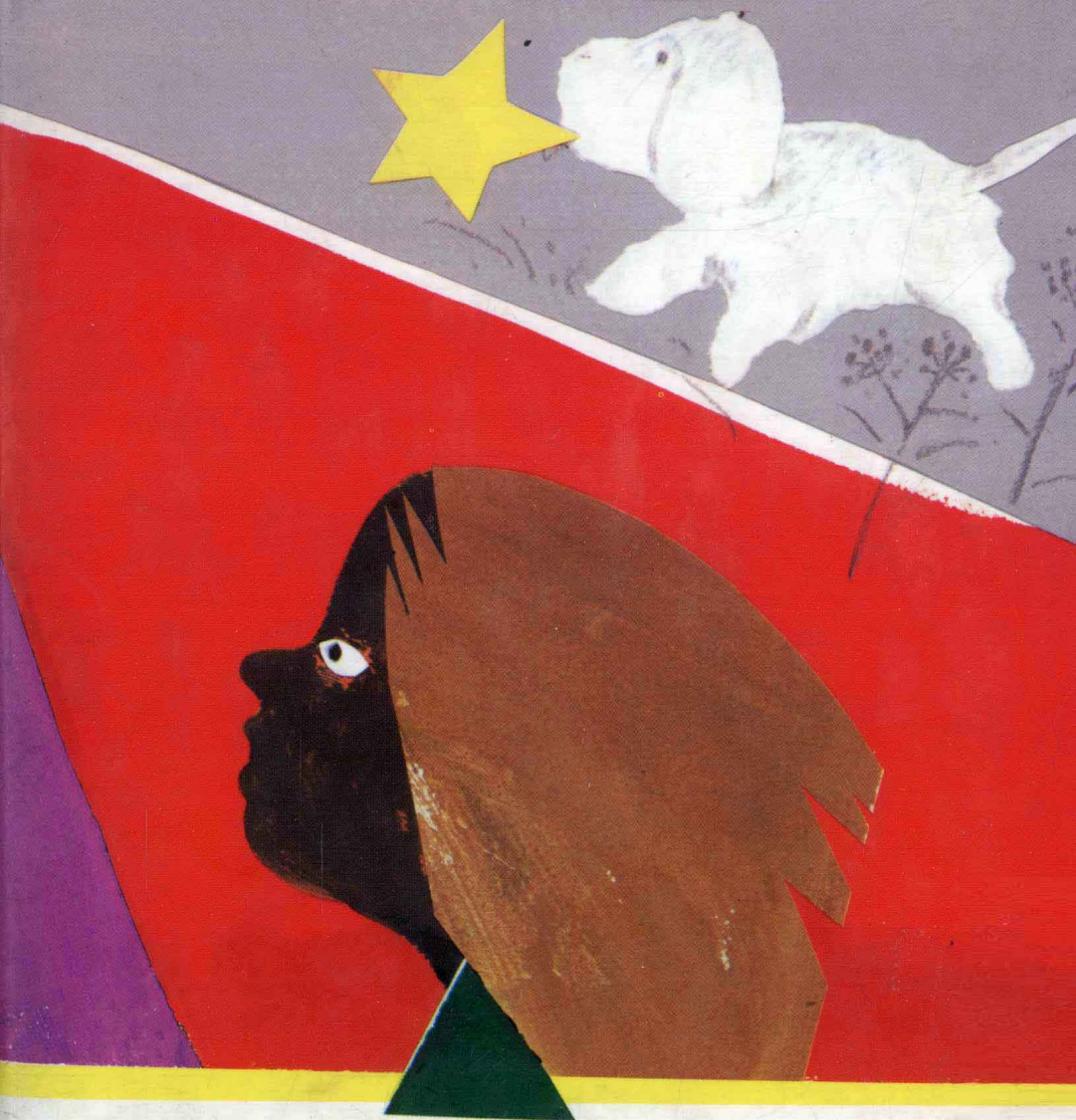


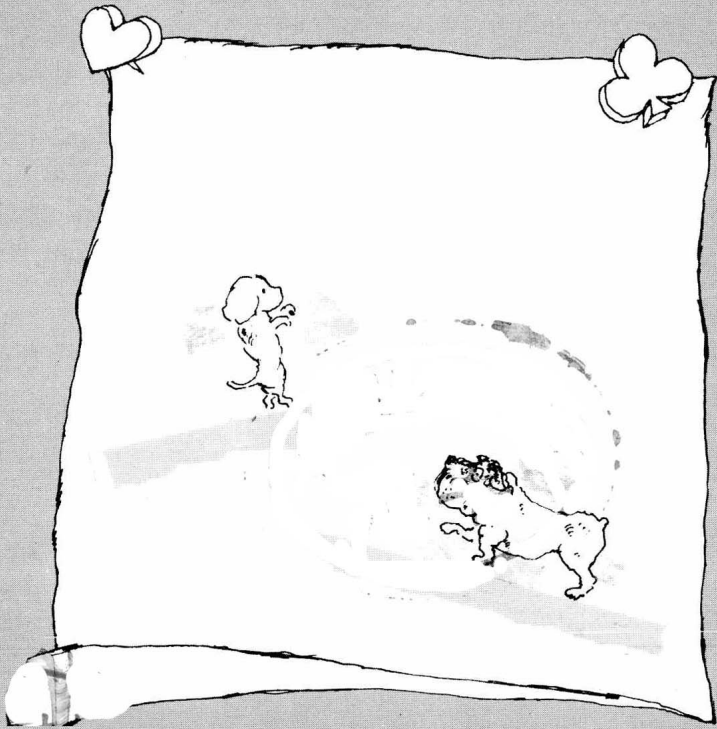
やくそくの赤いビー玉

赤木由子・作／かみやしん・え



創作子どもの本

やくそくの赤いビー玉



赤木由子・作／かみや しん・え

やくそくの赤いビー玉

創作子どもの本

第1版第1刷/1978年12月©

著者/赤木由子

発行所/株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3
電話/東京03-861-1861 (代表)
振替/東京0-64678

印刷・製本/ケイエムエス

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。
定価はカバーに表示してあります。

913 赤木由子

やくそくの赤いビー玉
金の星社 1978

185 P 22cm (創作子どもの本)

基本カード記載例

8393-041191-1406

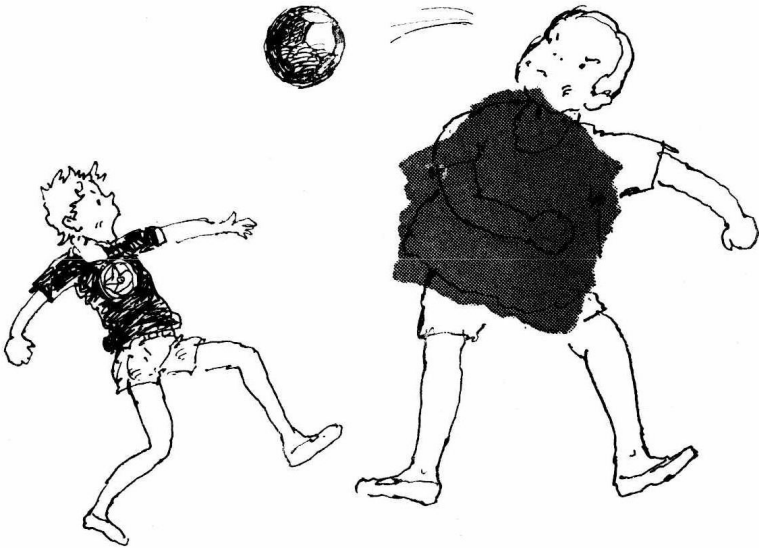
さと子の たからもの、

それは 赤いビー玉。

そっと、目に あててみると、

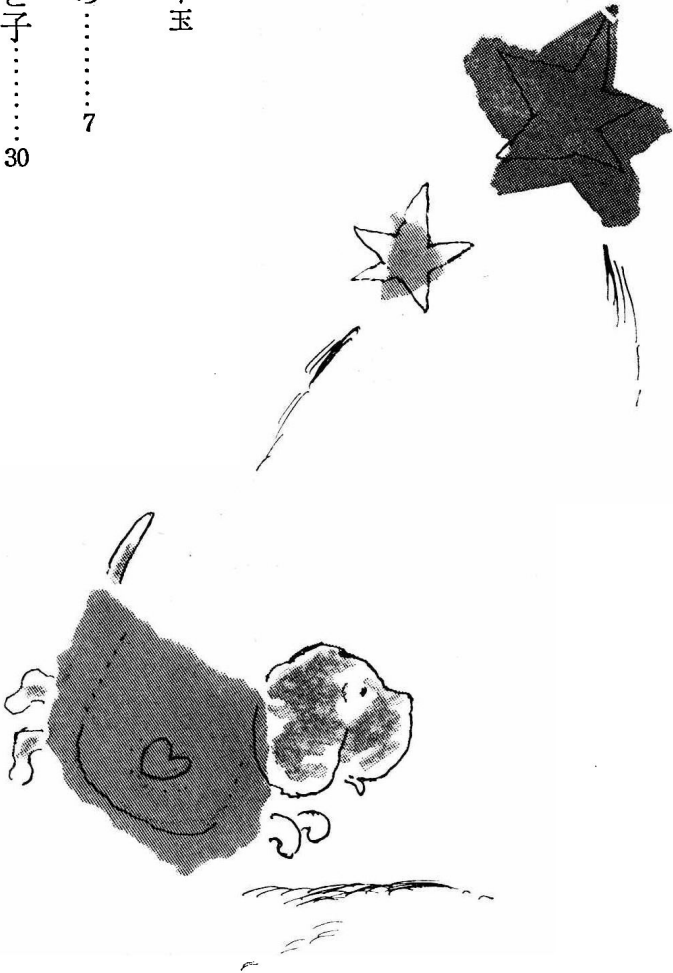
とても いいことが、

とびだしてくる。



●もくじ／やくそくの赤いビー玉

- 1 さと子の たからもの…………… 7
- 2 名字^{みょうじ}をわすれたさと子…………… 30
- 3 さと子の ヘディング…………… 55
- 4 まい子^こになったさと子…………… 75



5 さと子の顔はパンソウユウだらけ……………95

6 ぼうずになったさと子……………115

7 さと子は宇宙人？……………139

8 夕日を見つめるさと子……………161

あとがき……………184



作者・画家紹介

作者・赤木由子 (あかぎ よしこ)

1927年生まれ，日本児童文学者協会，日本子どもの本研究会々員。おもな著書に『柳のわたとぶ国』『はだかの天使』『夏草と銃声』『ひまわり愛の花』『あの雲の下で』『草の根こそう仙吉』など多数がある。

画家・上矢津 (かみや しん)

1942年，東京に生まれる。1970年，第五回ジャパンアートフェスティバル優秀賞受賞。1972年，第八回東京国際版画ビエンナーレ鎌倉近代美術館賞受賞。おもな児童書に『ふくろう横町のなかまたち』『きみはさよなら族か』など多数ある。

創作子どもの本

やくそくの赤いビー玉

赤木由子



① さと子の たからもの

さと子は、ベッドのなかで目をさました。

まだいっばいに、木々のみどりがあふれている。小鳥が、チチ、チチと、さえずって、

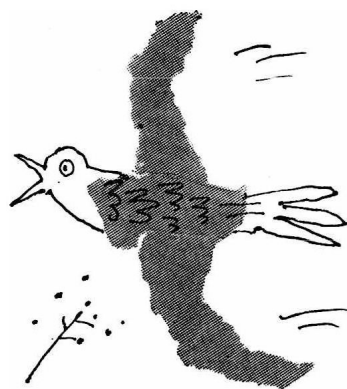
「さと子ちゃん、早く起きておいでよ。いっしょに歌をうたおうよ。」と、よんでいるようだ。

さと子の顔はひとりでに、にこにこして、歌がとびだしていった。

ほくらの体は鉄つくり

なにがきたってへしよげるものか

シュシュシュシュシュシュシュシュシュポー



さと子は、はっとして、自分の口をおさえつけた。

小学校三年生になったさと子は、むかしからね起きがよくて、目をさますとすぐ、うたいだすくせがあった。だから、同じ部屋にベッドをならべてねている子たちから、毎朝、もんくをいわれてきた。

さと子は、するつと、ベッドから下りると、まどのそばへ行った。

「なんだ、これは。」

いつも見なれている青葉学園の、雑木林のみどりだとおもったのに、木の葉のもよりのカーテンがかかっているのだった。

青森県の日本海にのぞむ海辺の村で生まれたさと子は、いなかのことばをまるだしにして、

「スズちゃん、おら、また、ねぼけたんだべか。」

といって、なにげなくふり向いた。

「ここは、どこだ？」

部屋へやのようすも、すっかり変わっていた。そこにねているはずの、一年生のスズ子も、五年生のけい子も、だれもいなかった。

そのかわり、新しい木あたらしのベッドがひとつと、勉強机べんきょうつくえ、ベビーダンスと、なにかもかも、ピカピカになっている。

「みんな、どこへ行ったの？」

しかし、答こたえてくれる子はいなかった。さと子は、おそろしくなっ
なきでした。

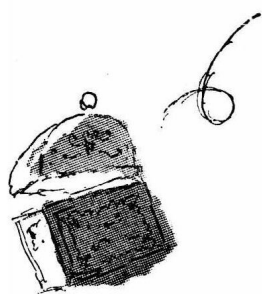
「おら、ゆめをみてるんだろうか。それとも本当ほんとうのぼかになってしまっ
たんだろうか……。うわーん。」

しばらく、さと子はなき続つづけた。

コトンと、音おとがして、ベッドから、

両手りょうてにはいる小さな、黒くろい箱はこがすべりおちた。

さと子は、それをひろって、ふたを開あけた。



赤いビー玉だまがひとつと、つけまつげが、かたほうだけはいっている。

さと子は、ようやくおもいだした。

「そうだっけ。おらは、ゆうべ、おそくに、東京の家いえにきたんだっけ。」
さと子は、きのうまで、青森県あおもりけんの弘前市ひろさきしの町まちはずれにある、青葉学園あおばがくえんという、親おやのない子のしせつにいた。それが、おもいがけなく、西村にしむらという家にもらわれて、東京の国立くにたちという町にきたのだった。

さと子は、ベッドのはしにこしをおろし、小箱こばこから、そっと、赤いビー玉をつまみだした。ビー玉をしずかに回転かいてんさせると、夕焼ゆうやけ色いろの光が、ゆらゆらと、ゆらめいた。

「スズちゃん、おら、きつと、幸福しあわせになるからね。」

さと子は、そこにいない、一年生のスズ子に話しかけた。

「おらが、幸福になったら、これは、スズちゃんにかえすからね。」

そのビー玉は、スズ子が、〈幸福の赤い玉〉といって、大切たいせつに持もって



いたものだった。

スズ子は、それを、東京へ行くことになったさと子に、

「こまだったことが起きたら、これに、ねがいをかけるといいよ。」

と、小箱ごと、くれたのだった。

さと子は、たからものをあつかうように、ビー玉だまを小箱にもどして、

こんどは、けい子がくれた、つけまつけをつまんだ。

さと子のつめのさきで、つけまつけは、うすっぺらな、黒いケムシのように、くねくねとゆれた。

さと子は、五年生のけい子のことをおもいだして、ひとりで、「ふふ。」と、わらってしまった。

目の細いほそけい子は、鏡かがみをのぞくたびに、

「おら、ぱっちりとした目の、美人びじんになりたいな。そしたら、いいところに、およめさんにいけるのにな。」

と行って、なげいていた。

そして、毎月、学園がくえんからもらうこづかいのなかから、六カ月もかかって、ようやくためた千円せんえんで、つけまつげを買かったのだった。

まぶたにつけてみると、目が三倍ばいくらい大きくなって、見えた。けい子は、それをかたほうだけ、さと子にくれて、

「これは、わたしのたからものだけど、あんたも、きりよう悪いわるから、これをおまもりにするといいよ。」

と行って、小箱こばこにいれてくれたのだった。

青葉あおば学園の子たちは、どの子も両親りやうしんに死しなれたり、あるいは、すてられたりして、自分じぶんも幸福しあわせな身みの上とはいえないのに、友ともだちが幸福になることを、ねたむどころか、せいっぱいのおくりものをして、おくりだすのだった。

さと子も、小さい時ときから、かなしいおもいを、たくさんしてきた。

さと子のお父さんは、漁師だった。いちど船に乗ると、十日くらい、帰ってこない。魚をたくさんとって、もどってくる日は、漁業組合のおじさんが、有線放送で知らせてくれた。

お母さんは、ちよっと、鏡をのぞいて口べにつけたりして、さと子といっしょに、浜へ走って行く。浜辺は、空も海も、すみからすみまで、まっかにそまって、大きな赤い夕日が、海にしずむところだった。やがて、その夕日から、ぼんとおちたように、船のかげが小さく見えってくる。

浜へ、出むかえにかけつけた人びとは、みんな、まばたきをわすれて、沖合いの船がすこしずつ大きくなっていくのを、みつめていた。

いよいよ、船が、小さな港にはいつてきて、イカリをおろす。日に焼けて、ひげづらになったお父さんたちが、次つきにおりてくる。

「あ、お父さんだ！」